白川研究所便り

『白川静著作集』別巻『甲骨文集・金文集』・『続 金文集』

第14号
発行
20.7.31

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所
〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-465-8306(事務局)
Mail ro-toyo@st.ritsumei.ac.jp
URL http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/index.html

目次 ◆ index

所長就任に当たって……芳村 弘道…2
退任のご挨拶……杉橋 隆夫…2
世界漢字学会第七回年会および土曜講座 大形 徹…3
第十三回立命館白川静記念
東洋文字文化賞の選考結果について……5
第六回東亜漢籍交流国際学術会議…芳村 弘道…8
漢字学研究会活動報告……大形 徹…9
二〇一九年度研究成果報告会……杉橋 隆夫…10
二〇一九年度「連続公開講座」……高島 敏夫…11
教育活動報告……後藤 文男…12
文化事業活動報告……久保 裕之…13
「第十回創作漢字コンテスト」……加地 伸行…16
九年目を迎えた「漢字教育士」の活動 久保 裕之…17
追悼文―客員研究員 津崎幸博先生の御逝去 芳村 弘道…18
「文字講話」特別上映会……19
白川静著作集の完結……20

所長就任に当たって

所長　芳村　弘道

この度、二〇二〇年度からの所長に就任することになりました。菲才の身に余る大任で、その責任の重さを深く感じております。新所長の命を受けた時に、先ず思い出しましたのは、二〇〇五年五月の設立に先立ち、白川静先生の御自宅に拝訪して研究所の構想を承った日のことでした。晩年の先生は、機会あるごとに東洋の文字文化の復興を訴えておられ、研究所設立はその実現に向けての重要な役割をもつというお考えを示されました。この御意志を体して当研究所が設立され、先生の偉大な研究成果をもとに東洋文字文化の普及と深化を図る文化事業と学術事業の両輪で活動を進めて参りました。

今年は、白川静先生御生誕百十周年、また当研究所設立より十五年に当たり、御意志の実現に一歩でも近づけるように、研究所の両輪の活動を発展させてゆきたく期しております。皆様のさらなる御協力を御願い申し上げます。

（文学部特任教授）

退任のご挨拶

杉橋　隆夫

白川研所長を拝命してから五年以上が経ち、常置研究所となってから丁度二年の任期を満了する三月末をもって、芳村弘道教授に後事を託することとなりました。

退任に当たって心残りなのは、恒常施設を実現出来なかったことです。現状施設について白川先生は、あくまでも開設当初の「仮事務所」であり、早々に本格的な設置場所が決定されるものと期待しておられました（本誌創刊号）。それと、戦後七十五年間未整理であったという、カザフスタン共和国図書館における東アジア言語文献に関する調査研究です。前年度内に現地での予備調査に着手する予定でしたが、新型コロナウィルスをめぐる情勢により延期となってしまいました。この災禍の終息と調査の早期実現とを願わずにはおられません。

長い間ご支援を賜り有り難うございました。今後ともどうかよろしく頼み申し上げます。

（立命館大学名誉教授）

世界漢字学会
第七回年会および土曜講座

副所長　大形　徹

第七回世界漢字学会が二〇一九年九月二十七日(金)、二十八日(土)に、立命館大学衣笠キャンパスで開催された。世界各地から八十余名の発表者が集い、漢字に関する最先端の研究が披露された。主催は、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所・世界漢字學會・中國文字研究與應用中心(華東師範大學)韓國漢字研究所(慶星大學)、後援は立命館孔子学院・日本漢字学会。

立命館大学の教員、客員研究員、漢字学研究会会員の以下十一名が研究発表および司会、コメンテーターを行った(司会・コメンテーターについては省略)。主な発表言語は中国語であった。

世界漢字学会
広報ポスター

佐藤信彌
甲骨金文中的「蒿」、「蒿京」

落合淳思
論清華簡『攝命』的「蒿京」與西周字形改變從甲骨文字到楷書

末次信行
筆寫文字的系譜—以殷末周初以前的標準書體為中心

松宮貴之
古代奴隷制與墨刑—分析文物和文字演繹墨子思想的基底

出野文莉
白川靜博士在海内外的學術影響

楊冰
中国詩論中的「我」的概念

重信あゆみ
關於江戸時代寺子屋教育所使用的漢字教材『小野篁歌字盡』

杉橋隆夫
京都、上賀茂神社收藏「賀茂舊記」的史料價値和分析視角

李強・大形徹
推拿手法「㨰」字考

名和敏光
馬王堆漢墓帛書『陰陽五行』甲篇『雜占之二』『上朔』及『祭』(一)
綴合校釋

第八回は今年、韓国、ソウルの延世大学で行われる予定。

二十八日（土）の午後は世界漢字学会に連続する形で、立命館土曜講座が開かれた。

世界漢字学会の発表者の中から、台湾・ノルウェイ・ベトナム・日本・韓国・中国の各国を代表する六名の研究者が一般市民向けに講演を行った。「世界の漢字研究」というゆるやかなテーマのもと、それぞれの発表内容は次の通りである。

朱岐祥（東海大学（台湾）教授）
「漢字と文化」
何莫邪（コペンハーゲン大学教授）
「古代中国の言語学の方法論を探る」
阮俊強（ベトナム社会科学翰林院漢喃研究院教授）
「ベトナムの文字を民族中心主義から分析する」
大形徹（立命館大学衣笠総合研究機構客員教授）
「国号「日本」の「本」はどのような意味か」
河永三（慶星大学教授・韓国漢字研究所長）
「東アジアにおける文字を中心とする文明の根源」
臧克和（華東師範大学終身教授・世界漢字学会会長・当研究所上席研究員）
「中国から見た邪馬台国論争」

※発表者の所属は当時のもの

参加者は二〇〇名をこえる盛況であった。一般市民にも理解しやすいようにと配慮し、中国語の講演は同時通訳を行い、また、すべての資料は日本語に翻訳して配布した。

二十九日は文化考察として、宇治の万福寺とその塔頭の宝蔵院を訪れた。万福寺は江戸時代に中国の隠元禅師が開いた寺である。宝蔵院には鉄眼の残した一切経の版木六万枚があり、現在も摺師の矢野敏行氏が大般若経などを摺っている。その後、祇園にある漢字ミュージアムを訪れた。

（衣笠総合研究機構教授）

土曜講座会場の様子

世界漢字学会第七回年会集合写真

立命館白川静記念東洋文字文化賞の選考結果について

立命館白川静記念東洋文字文化賞は、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所が、東洋文字文化の分野における有為な人材を奨励支援するために、功績のある個人および団体の業績を表彰することを目的としています。日本社会・文化の継承と発展、東アジアの平和と繁栄のために本賞の制定がその一助となることを願っています。

二〇一八年度も国内外より応募があり、厳正な審査の結果、お二人の方の受賞が決定しました。

授賞式は二〇一九年六月二二日（土）に衣笠キャンパス平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルームにて、仲谷善雄総長臨席のもと執り行われました。受賞者の岡村秀典氏、黄庭頎氏のお二人には、受賞挨拶とあわせてご自身の研究成果について御報告をいただきました。また、同日には真下厚氏（元立命館大学文学部教授）による記念講演「白川学と『万葉集』」も行われました。

〈第十三回〉二〇一八年度募集分 立命館白川静記念東洋文字文化賞優秀賞

岡村　秀典
京都大学人文科学研究所　教授

受賞理由

岡村氏は大学院の修士論文以来、中国古代の鏡の研究を行われ、京都大学人文科学研究所在籍後、二〇〇五年から二〇一一年までの六年間、共同研究「中国古鏡の研究」を主宰し、その成果の一端を「後漢鏡銘の研究」として二〇一一年の『東方学報』京都第八六冊に示された。こうした長年の研究の蓄積を土台にして、二〇一七年に岩波新書『鏡が語る古代史』を公刊された。日本における中国の古鏡の研究は、従来、鏡の背面に鋳造された紋様・図像の研究が主流であったが、岡村氏は前漢から三国魏におよぶ鏡の韻文形式の銘文に注目し、これを正確かつ詳細に解読して、男女の愛情をうたう抒情詩というべきもの、また儒家思想や陰陽五行思想・神仙思想・神話を背景にもつものなどがあり、漢代の鏡はまさに時代と人々の心を映し出していると解説されている。また鏡の制作者すなわち鏡工に関しても新たな見解を加えておられる。官営の工房から独立し、独自の意匠や銘文に工夫を加えた鏡工の広がりと歴史的な関係についても目配りの行き届いた説明がなされている。『鏡が語る古代史』は、中国、日本、朝鮮半島から出土した古鏡という考古学資料が駆使され、一般の読者に向けての懇切かつ平易な解説が施されており、それに導かれ、中国古代の歴史・思想・文字のみならず、卑弥呼の鏡との関係から日本古代史にもおよぶ豊かな知見が得られる好著となっている。岡村氏による古鏡の銘文研究の優れた成果が示された本書は、まことに東洋文字文化の豊潤な世界を広く知らしめる著書であると高く評価できる。

受賞者の声

この度、白川静記念東洋文字文化賞教育普及賞という大変栄えある賞をいただき誠に光栄に存じます。

私の専攻する考古学は中国では宋代以来金石学の伝統がありますが、近代的な考古学が盛んになるにつれて伝統的な金石学が衰え、日本や中国でも考古学の文字離れがますます強まっています。今回の受賞対象になりました鏡の研

究についても、文様のデザインから年代を研究するということは盛んではありますが、鏡の銘文についてのまとまった研究はないといった状況でした。

そこで京都大学人文科学研究所では十五年ほど前より各方面の研究者を交えて鏡の銘文に関する共同研究を行い、漢代から西晋末にかけての五百銘近い銘文を集め、その詳細な訳注を作成しました。岩波新書『鏡は語る古代史』はそのコンパスをもとに一般向けの啓蒙書として書いたものです。

今回金石学に大きな足跡を残された白川静先生の記念文化賞をいただいたことは考古学ではおそらく初めてのことだと思いますが、考古学の研究者、考古学に関心を持たれている一般の方々にも金石学の面白さを知っていただき、文字文化に対して関心を高めてもらえるよう努力したいと考えております。

立命館白川静記念東洋文字文化賞奨励賞

黄　庭頎
仏光大学中国文学与応用学系　助理教授

受賞理由

黄庭頎氏は、甲骨・金文から戦国・秦漢の竹簡に及ぶ出土資料を対象に研究を進める気鋭の研究者である。今回、受賞の対象となった論文「従述祖至揚己―両周「器主曰」開篇銘文研究」は、銘文の始まりが「器主曰く」すなわち「青銅器の制作主が言うには」という形式をもつ西周・東周（春秋・戦国期）の金文を詳細に分析した研究である。西周期では祖先の功績を先ず述べ、ついで器主みずからの職務や事跡が祖先の功績に則ったものであると位置付け、一族の栄光の永続を願うという構成であったが、東周になると次第に器主自身の功績のみを誇る内容に変化してゆくことを明らかにし、この事象には両周間における宗法制度、社会構造、思想の変遷が反映していると論じておられる。本論文は金文の形式論に止まらず、周代の歴史と思想に関する研究としても優れている。また青銅器文化は政治秩序の変革の影響を受けて変容したという白川静博士の見解や欧米の研究者による出土文献のテキスト論も吸収した重厚な論文となっている点も高く評価できる。

また「日本漢学家白川静的金文研究及其影響」は、白川博士の金文研究の目標が金文を歴史資料としてとらえることにあり、殷周の連続性に着目した所論は殷代の国家構造に関する研究の先駆となったこと、『金文通釈』が日本の殷周史研究の基礎となったことなど、主に歴史学の方面での貢献を評価されている。日本や海外における古文字学や先秦史の研究動向を視野に入れるとともに、白川博士の研究に対する従来の評価を充分に把握し、適格かつ公平な論評を行っておられる。

この二篇の論文は、黄庭頎氏の古文字の研究とその研究史に関する優れた業績として高く評価しうるもので、氏の今後の研究の発展が大いに期待できる。

受賞者の声

この度は白川静記念東洋文字文化奨励賞にご選出いただき誠にありがとうございます。私のような若手の学者にとって大きな意義がある受賞であり、大変光栄に存じております。

私は大学院生の頃から中国の古文字学、特に甲骨文字及び金文を研究しております。博士論文では青銅器、春秋時代の銘文の経緯に注目し、白川静先生の学術論文を読み、先生の見解を引用させていただきました。二〇一七年に私は日本漢学者である白川静先生の金文研究及びその影響についての論文を執筆しました。その際私は次のこ

とを発見しました。台湾と中国のどちらも先生の著作の多くを翻訳しておりますが、その大部分が一般向けの書籍であり、学術論文の翻訳はそれほど多くはないのです。それはこれから研究を始める若者にとって残念なことです。

私自身、白川先生の甲骨文及び説文解字の研究をもっと詳しく知りたいと思います。私が現在行っている研究は、先生の研究を台湾学界に紹介するためのものです。また、私は『字統』『字通』『字訓』についても研究を続けるつもりです。これら三冊の意義は、日本社会における漢字文化について考えることであり、同時に今日の台湾における中国文字の研究者にとって異なる学びが得られることでしょう。

選考委員

委員長　杉橋　隆夫（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所　所長）
委　員　加地　伸行（立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所　研究顧問）
下中　美都（株式会社平凡社　代表取締役社長）
芳村　弘道（立命館大学文学部　教授）
上野　隆三（立命館大学文学部　教授）
萩原　正樹（立命館大学文学部　教授）

第13回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」表彰式の様子
（2019年6月22日、立命館大学衣笠キャンパス平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルームにて）
前列左より芳村弘道副所長、杉橋隆夫所長、仲谷善雄総長、岡村秀典氏、黄庭頎氏、真下厚氏
後列左より津崎史氏、石井真美子教授、松本保宣教授、荻原正樹教授

第六回東亜漢籍交流国際学術会議

所長　芳村　弘道

当研究所は、韓国の高麗大学校漢字漢文研究所、中国の南京大学域外漢籍研究所と学術協定を結び、「東亜漢籍交流国際学術会議」を行っている。その第六回が二〇一九年一〇月一二日に高麗大学校の主催で開かれた。

当研究所からは、衣笠総合研究機構専門研究員の富嘉吟氏、アジア・日本研究機構専門研究員の靳春雨氏、大学院生の田中京氏と芳村が参加した。富氏は、江戸時代後期に昌平坂学問所で出版した『唐人選唐詩』のうち六種の底本について、それが林家旧蔵の写本をもとに校勘したものであることを論ずる「官版『唐人選唐詩』底本考」を発表した。靳氏は「立命館大学図書館西園寺文庫所蔵の『詞綜』研究」を発表し、該庫所蔵『詞綜』の書き入れの詞学的価値を紹介し、西園寺公望の詞の愛好に論及した。田中氏の発表「大東急記念文庫蔵『高常侍集』残本および高適集の諸版本について」は、唐の高適集の版本を調査し、大東急記念文庫所蔵の残本『高常侍集』が現存唯一の宋版であることを論じた。芳村は漢字漢文研究所の沈慶昊所長の研究発表「『星湖僿説』における『日知録』の引証形式」のコメンテーターを務めた。

翌日には文化踏査が行われ、午前に韓国学中央研究院蔵書閣の特別展示「朝鮮王室の誌石と碑石搨本」の参観、および古文書研究室長の安承俊先生による解説を聴き貴重な古文書を見学した。午後は驪州市に赴き、新羅時代の創建の古刹である神勒寺を参観した。

今回は、協定の三研究所の研究者だけでなく、アメリカのボストン大学 Wiebke Denecke 教授、台湾中正大学の毛文英教授、シンガポール南洋理工大学の衣若芬教授、香港公開大学の羅楽然教授の参加もあって、学術交流をさらに広げ、また深化させることができ、「国際学術会議」の名にふさわしい充実した会議となった。二〇二〇年の第七回は、創立二十周年を迎える南京大学域外漢籍研究所の主催により、一〇月一〇日に開催予定である。

（文学部特任教授）

第六回東亜漢籍交流国際学術会議の様子

漢字学研究会活動報告（二〇一九年度）

副所長　大形　徹

四月（七十一回）から二月（八〇回）までキャンパスプラザ京都・立命館大学大阪いばらきキャンパスで行った。参加者は立命館大学・京都大学・仏教大学・大阪府立大学・同志社大学・京都府立大学院生・仏教大学大学院生・大阪府立大学院生・書家等、延べ一三〇名であった。

以下、議事録より摘録

第七十一回　四月十三日

新出金文講読：山田崇仁「王子午鼎」

献本：『漢字の字形』（落合淳思）・『桐墨』第十号（佐藤信弥）・「漢字構造の代数的記述についての予備的考察」（白須裕之）・「楊惲の生卒年について」（末次信行）

第七十二回　五月二十五日

研究発表：松宮貴之「殷周期に於ける墨刑に就いての一考察―文字資料と民俗学を中心として」

第七十三回　六月十五日

研究発表：山田崇仁氏「王子午鼎」・末次信行氏「松宮貴之「殷周期に於ける墨刑に就いての一考察―文字資料と民俗学を中心として」補足」

第七十四回　七月二十日

新出金文講読：秋山陽一郎「保員簋」

献本：『人文』第六十六号（白須裕之）

第七十五回　九月二十一日

報告：村上幸造氏「金属工芸―技術復元とその裏側」参加報告

献本：『東方』第四百六十二号（秋山陽一郎）・『白川研究所便り』第十三号（白川研事務局）・高島易断本部編纂『令和二年二〇二〇御神宝』（笠川直樹）

新出資料講読：落合淳思氏「甲骨文字通解　河南安陽市殷墟大司空村出土刻辞牛骨」

第七十六回　十月十九日

報告：佐藤信弥「世界漢字学会第七届年会」参加報告

新出資料講読：落合淳思「甲骨文字通解　河南安陽市殷墟大司空村出土刻辞牛骨」（続）

研究発表：落合淳思「亦声の出現過程について」

第七十七回　十一月九日

研究発表：石川大我「殷墟甲骨文「地名＋十干」称謂考」

新出金文講読：笠川直樹「哀成叔鼎」

第七十八回　十二月十四日

報告：佐藤信弥「日本漢字学会第二回研究大会参加報告」

新出金文講読：三輪健介「舲簋」

第七十九回一月十一日

新出金文講読：笠川直樹「哀成叔鼎」

研究発表：小野大樹「西周冊命金文に見える祖先崇拝―冊命儀礼との関わりを中心に―」

第八十回二月二十二日

新出金文講読：笠川直樹「哀成叔鼎」

『漢字学研究』第七号を二〇一九年九月に発行した。目次は以下の通りである。

追悼　松井さんのこと（吉本道雅）

金文通解　叔矢方鼎（佐藤信弥）　靜方鼎（三輪健介）　伯唐父鼎（村上幸造）

字説　醫について（大形徹）

翻譯　甲骨文法―陳夢家『殷虚卜辭綜述』第三章　文法（上）（村上幸造）

子彈庫「楚帛書」十三行文譯注（笠川直樹）

報告　立命館大學白川靜記念東洋文字文化研究所・漢字學研究會シンポジウム「中國古文字學研究の最前線」報告（秋山陽一郎）

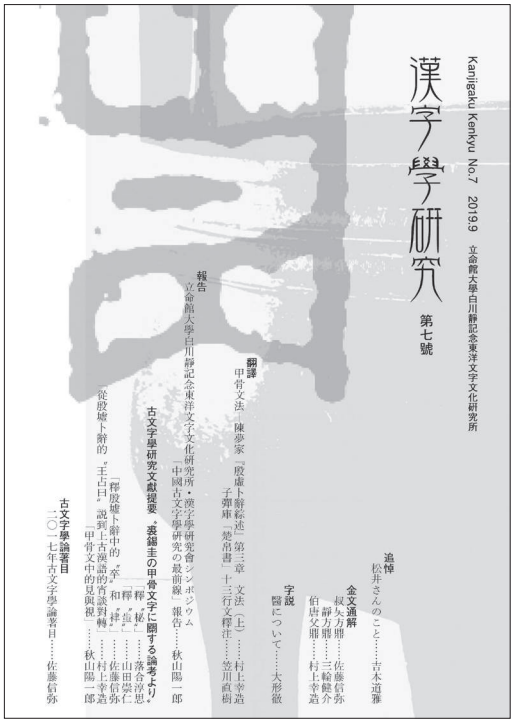
古文字學研究文文獻提要　「釋「秘」」（落合淳思）　「釋「蚩」」（山田崇仁）「釋殷墟卜辭中的「卒」和「祥」」（佐藤信弥）　「從殷墟卜辭的「王占曰」說到上古漢語的宵談對轉」（村上幸造）　「甲骨文中的見與視」（秋山陽一郎）

古文字學論著目　二〇一七年古文字學論著目（佐藤信弥）

（衣笠総合研究機構教授）

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所　編

漢字学研究　第七號（二〇一九年九月発行）



二〇一九年度研究成果報告会

研究顧問　杉橋　隆夫

白川研究所の二〇一九年度研究成果報告会は、二〇二〇年二月二十五日（火）・二十六日（水）の両日に亙り、末川記念会館の第三会議室をメイン会場として開催された。今年度は研究所重点研究プログラム（第一～第三プロジェクトで構成）による成果の報告を主眼とし、なるべく「若手」に発表の機会を与えることも考慮した。海外からの参加を含め二十余名の関係者が集い、盛会裡に日程を消化することが出来た。特に二日目の行事は、芳村弘道・文学部教授（副所長）の（専任）定年退職を祝う趣旨が込められており、華やか、かつ有意義な会合となったのが嬉しい。

第一日目は午後一時三十分開始。まず第一プロジェクト（中国の漢字を中心とする文字文化の発展・受容・展開に関する総合的研究）からは、宮本紗代（本学大学院学生）「『神仙伝』中の神仙・神人・真人・仙人」、佐藤信弥（客員研究員）「清華簡《摂命》の〝蒿京〟と西周甲骨金文中の〝蒿〟と〝莽京〟を論ず」、大形徹（副所長）「漢字学研究会の二〇一九年度の活動と『世界漢字学会』『土曜講座』」、計三本の報告があった。

次いで第三プロジェクト（日本文献研究）よりは、杉橋隆夫「『賀茂旧記』の史料的価値と分析の試み」に加えて、上島理恵子（客員研究員）「『賀茂旧記』全編数値化と解釈」が発表された。

二日目は全日が第二プロジェクト（日中韓漢籍研究）の活動報告に充てられた。午前十時三十分から第二会議室において、芳村教授が長年に亙り蒐集して来られた長恩書屋蔵本の展観が、ご自身の解説付きで行わ

れた。

午後の部では、靳春雨（立命館アジア・日本研究機構専門研究員）・田中京（本学大学院学生）「韓国所蔵唐本調査報告」、魯耀翰（高麗大学校研究教授）「李朝初期唐本輸入概括―経部を中心に」、住吉朋彦（慶応義塾大学教授）「論語句解の伝播について―朝鮮渡り唐本管見―」など、済々たる研究が報告された。

（立命館大学名誉教授）

長恩書屋蔵本展示の様子

研究成果報告会の様子

「連続公開講座」の報告

客員研究員　高島　敏夫

二〇一九年度の連続公開講座は「西周前期の雄篇《大盂鼎》の銘文を読む」と題して、十一月二十三日（土）、一月十八日（土）、二月一日（土）の三回構成で実施した。《大盂鼎》は、殷王朝が倒れた後の西周前期後半に入った頃に作られた青銅器である。銘文には、西周王朝の文王が天の命を受けたことや、殷王朝が滅んだ原因などが記されているのだが、当時の王（康王）によって語られた言葉を記録する形で記されている点で非常に貴重な資料になっている。儀礼の場特有の難解な言葉も少なくないが、できるだけ理解しやすいように整理に努めた。関連事項として、古代宗教の特質や、「徳」の原義が古代イスラエル研究において措定された「カリスマ」概念とほぼ同義であることなどにも言及しながら、古代社会一般に見られる共通性にも触れた。

（白川研究所客員研究員）

「連続公開講座」の様子

教育活動報告（二〇一九年度）

運営委員　後藤　文男

二〇一九年度も立命館の各附属校の「白川式漢字学習法ワーキンググループ」（白川WG）の先生方を中心に、以下のような活動を行いました。

①漢字ワークシート『成り立ちとつながりで学ぶ漢字35』第三集作成。

漢字ワークシート『成り立ちとつながりで学ぶ漢字35』の第三集の刊行に向けて、今年度も毎月一回の定例会で検討を重ねました。時間はかかりましたが、ようやく「第三集」の編集が終わり、二〇二〇年四月に刊行することとなりました。中学校・高等学校での活用を前提に一年で一冊のワークシート三年分を作ることを当初の目標としてきましたので、今回の第三集で「ワークシート」シリーズは一応完結とします。次年度からは、新たな「成り立ちとつながりで学ぶ」漢字教材を開発していくことにしています。

②「白川文字学に基づいた漢字学習（白川漢字）」の取り組み。

今年度は小学校での実践がとても豊富な年となりました。一年間で取り組まれた「白川漢字」の実践は八十四回にも及びました。一年生から四年生までの「読書」の時間に、メディアセンターの大橋先生を中心に取り組みました。「絵本」の読み聞かせから漢字の学習へとつなげていく試みやiPadを活用した漢字学習の試みなど、児童たちの興味や関心を引き出す多様な取り組みが行われました。こうした取り組みを通して、児童たちの漢字熱も高まり、伊東信夫先生の『漢字なりたちブック』（太郎次郎エディダス）の貸し出し数は年間で五〇〇冊を超えました。また、初めて漢字を習う一年生には、十月「貝からつながる漢字」や「児童の名前」を活かした漢字学習を後藤が行いました。十月の保護者会行事には、漢字教育士の中村例先生に来ていただき、「消しゴムハンコを作ろう」という企画を行いました。六〇名ほどの児童たちが参加しました。二月には、長谷川先生が五年生に『学ぶは人生』のタイトルで、白川静先生の生き方を学ぶ授業を行いました。そして、三月にはTBS系列のテレビ番組『教えてもらう前と後』という番組で、白川漢字が取り上げられました。この間の意欲的な取り組みもあって、小学校では、二〇二〇年度から全学年の国語の授業で「成り立ちとつながりで学ぶ漢字」学習がスタートすることになっています。

それ以外の附属校での取り組みは以下の通りです。

- 立命館慶祥中学校では、六月に白川研事業担当の久保裕之先生を講師に中学一年・二年を対象に『白川静　立命館が生んだ大学者』というテーマで講演会を開催しました。
- 立命館中学校・高等学校では、漢文と漢字の成り立ちを組み合わせた実践が行われました。

例：「管鮑の交わり」と「与」、論語と「友」・「朋」等。

- 立命館守山中学校では、一年生に「口（さい）」、三年生に「足」にまつわる漢字を取り上げた授業（九月と三月）を行いました。
- 立命館宇治中学校では一月の「ICT教育研究会」で、「漢字家族から共通する意味を探ろう！」をテーマに、一年生での実践を公開しました。取り上げた字は、「分」「由」「兆」でした。

⑤白川文字学に基づいた漢字講座等の開催。（担当：後藤）

大阪府河内長野市の市民講座「くろまろ塾」で、四回目となる漢字講座に取り組みました。今年度は「古代文字で見る『衣・食・住』」をテーマに三回の講座を行いました。昨年度同様毎回八〇名近くの方々の参加がありました。今年度も、夏休みの時期と重なったため、午前中は小学生を対象にした「漢字探検隊」（久保先生）を開きました。午後からの講座は、幅広い年齢層の方々が受講しました。

二〇一九年度も多岐にわたる活動をしてきましたが、「ワークシート」づくりが一段落つきましたので、二〇二〇年度は新しい企画を考え、各附属校を中心に「白川文字学」の普及と教育現場での取り組みをさらに旺盛に展開していきたいと考えています。

（教職研究科准教授）

文化事業活動報告（二〇一九年度）

文化事業担当職員　久保　裕之

体験型漢字講座「漢字探検隊」

二〇〇七年度より始まった「漢字探検隊」は、毎回一つのものをテーマとして、座学だけではなく、見学や体験を通して漢字の成り立ちとそのもとになった自然や文化を学習する体験型の講座である。二〇一九年六月二日の「第二回北海道漢字探検隊」にて全国通算第二百回を迎え、また大分県で初めて開催するなど二〇一九年度は全国七道府県で十回開催され、延べ約一一〇〇名の参加があった。開催にあたっては、立命館アジア太平洋大学、立命館大学書道部や各地の漢字教育士の協力を頂いた。

2019年6月
京都漢字探検隊「漢字ワークショップ祭」

2019年11月
大分漢字探検隊「漢字ジェスチャー大会」

学内他組織との連携事業

立命館附属校教員との白川文字学に基づく漢字教材制作ワーキンググループ（詳細は別稿に）も六年目を迎え、その研究出版である『成り立ちとつながりで学ぶ漢字シート35』は第二集まで刊行、附属小中学校で教材として使用されている。第三集は二〇二〇年六月に刊行の予定である。また立命館慶祥中学校（北海道江別市）と初芝立命館中学校（大阪府堺市）への出張授業を行った。

立命館大学が全国で開催している「立命館大学一日キャンパス」（父母教育懇談会）の中では「アカデミック講演会」がプログラムとして組まれ、白川研関係では、北海道（テーマ「北海道で漢字探検―北の大地は漢字の宝庫―」）、福島県（テーマ「福島県で漢字探検―漢字のまち喜多方も―」）、群馬県（テーマ「群馬県で漢字探検―上毛かるたと共に―」）の三会場で漢字教育士が講演した。また社会人向け学習組織「立命館アカデミックセンター」では、大阪梅田キャンパスにおいて、二〇一九年四月から六月および二〇二〇年一月から二月にかけて「改めて漢字の謎―ほんまかいな⁉漢字の常識」講座を開催した。

二〇一九年十二月に東京ビッグサイトで開催された「エコプロ2019」に立命館も出展し、湊宣明テクノロジー・マネジメント研究科教授ほかにより開発がなされたオリジナル古代文字「鯱旗＋R甲骨体」を紹介した。

2019年12月エコプロ2019

他の機関との連携

公益財団法人日本漢字能力検定協会（京都市）とは「漢字教育士」養成講座事業の受託を契機に、同検定受検者への当研究所の広報活動や情報交換等が活発に行われ、七〇〇名を超える「漢字教育士」の約四分の三を占める重要な輩出元となっている。産経新聞社（東京都千代田区）との共催で開催している「創作漢字コンテスト」は今年で第十回を数えた。アンバサダーに名誉漢字教育士の武田鉄矢氏を迎え、応募者数は二万一千通弱を数えた。本コンテストは富国生命保険株式会社の特別協賛と株式会社Z会、株式会社平凡社および株式会社モリサワの協力を受けている。（詳細は別に）

放送大学大阪学習センター（大阪市）では同校の面接授業に「漢字学」を開講、八科目を修了すると「漢字教育士」資格が取得できる。また関西文理総合学園の事業である「京都高齢者大学校」（京都市）と「京都社会人大学校北近畿校」（京都府福知山市）の講座に招かれている。

公益財団法人中部日本書道会（愛知県名古屋市）の創立八十五周年記念「第六十九回中日書道展」の特別展示「どうして漢字はその形？　白川静　文字研究の姿」に協力した。

このほか、石川漢字友の会（石川県金沢市）、摩気高山こども未来塾（京都府南丹市）に出張講座に招かれた。

自治体との関わり

福井県では小学校に「白川文字学」に基づく漢字教育を取り入れる政策を実施しており、県内に拠点校を設け、研修や学習会が開催されている。この取組はさらに中学・高校教育の領域へ広がりを見せている。「福井県白川静漢字教育賞」への協力や「漢字教育士研修会」への講師派遣を受けたりするなど、密接な関係が続いている。

本学びわこ・くさつキャンパスを擁する立命館大学と草津市とは、すでに教育研究連携に関する協定を締結しているが、同市では基礎学力の定着と学習意欲の向上を図るため、二〇一〇年度より市立の全小・中学校にて漢字・計算・英語の三検定の受検に取り組むようになった。そのうち漢字教育を側面支援するため、草津市教育委員会との共催事業として「草津漢字探検隊」が二〇一一年度から始まり、年二回の開催も定例化している。

兵庫県朝来市和田山生涯学習センターでの市民講座は二〇一一年度から始まり、九年目を迎えた。兵庫県姫路市での取り組みもますます盛んになっている。姫路市生涯大学校で開講中の「漢字学」は第四期生も入学、二〇二〇年度には第五期生の開講も確定している。二〇一九年七月から八月には、夏期講座として特別編を三回開催した。

公益財団法人河内長野市文化振興財団（大阪府河内長野市）の「くろまろ塾」でも七月から八月にかけて大人向けと子供向けの講座を計五回開催した。

2019年6月
中日書道展特別展示

2019年9月
姫路漢字探検隊「科学と漢字」

大阪府河内長野市「くろまろ塾」

東日本大震災復興支援活動「漢字で元気に」

「漢字で元気に」は、二〇一一年三月に発生した東日本大震災の復興支援活動の一つとして、年齢・性別に関わらず共通の話題にできる漢字・日本語を、家族をはじめとするコミュニティーの交流ツールとなるように、そしてそこから生まれてくる絆の力を震災復興に向けられるように、さまざまな話題や知識を提供する活動を行おうとする試みである。二〇一一年一〇月に福島市と宮城県角田市とで活動を開始、毎年岩手県も含めた三県で活動を行っている。二〇一九年度では十月に郡山市公会堂で「漢字あそび大会」を開催した。福島県での活動では福島大学・澁澤尚研究室の、宮城県角田市での活動では同市議会議員の菅野マホ氏の協力を仰いでいる。

2019年11月
福島漢字探検隊「漢字あそび大会」

第十回創作漢字コンテスト

研究顧問　加地　伸行

当研究所と産経新聞社との共催で第十回創作漢字コンテストが行われ、入賞作品を選出した（産経新聞令和元年十二月二十三日付）。応募総数は二万七七八点。社会人・大学生が対象のA部門、高校生対象のB部門、小・中学校生対象のC部門それぞれの入賞作品を選定の上、最高賞の「白川創作漢字最優秀賞」二点を選んだ。また、第十回を記念して特別賞の内、特に長寿者部門（七十歳以上の応募者から選考）を設け、六点の入賞があった。

最優秀賞は、「海」（かいようおせん）。現代の大問題である海洋汚染を表現したのは中学校二年生。また同賞の「喜」（バンザイ）は、ほんのわずかの手入れで絵画的にも躍動感が伝わる。

今回の特徴として、中学生の場合、担当教員の協力が大きく多数の応募があったことは特筆に価する。その中でも、「神」（たまぐし）は神道の玉串を、「神」（じゅうじか）はキリスト教の十字架を巧みに織り込んだ出色の、ともに中学生の作品で特別賞とした。同じく、最高齢九十三歳の作品「測」（もくそく）も、その巧みさが評価された。

創作漢字は、既存の漢字に対して、個性的解釈を加えて変形することによって成り立つ。しかし、全く新しい漢字を作っても、読みや意味に手がかりがなく、結果的には成功しない。そうではなくて、だれもが知っている漢字を対象として独自の解釈を与えて変形し、新漢字を生み出すと成功する。それは、これまでの新漢字誕生の歴史そのものである。そうした歴史も楽しもうというのが創作漢字コンテストである。

（大阪大学名誉教授）

九年目を迎えた「漢字教育士」の活動

文化事業担当職員　久保　裕之

二〇一一年度に創設した「漢字教育士」資格認定制度もまる九年が経過し、今では資格認定者が七〇〇名を数えるようになりました。

「漢字教育士」とは、漢字の成り立ちや文化的背景、現代の漢字・日本語の状況を理解し、幅広い知識を有するとともに、「教える力」を身につけた方です。漢字の楽しさを知った方が、それを伝えることにより、世の中に漢字文化の種をまき、花を咲かせようという思いから、この資格は生まれました。日本の社会においては、漢字・日本語は老若男女かかわらず広く使われる媒体です。「漢字教育士」の活動が、人々の交流を広げ、絆を強めるものになることを期待しています。

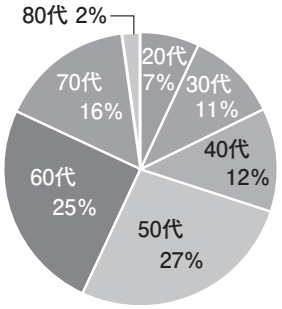
漢字教育士資格認定講座の方式は、①指定機関での指定科目の修了、②漢字教育士資格認定ウェブ講座の修了の二つです。

指定機関としては、放送大学大阪学習センターでの面接授業「漢字学」が毎学期開講されており、毎回関西地方をはじめとする全国からの聴講申込のある人気科目となっています。八単位取得が「漢字教育士」資格取得の条件となっており、その取得には最短四年かかりますが、地道に単位を取得して「漢字教育士」の取得をされた方も十一名いらっしゃいます。また姫路市生涯学習大学校では、二〇一六年度より二年コースの「漢字学」が開講しました。現在第三期生・第四期生各七〇名の方が対面講座で学んでおり、これまでに十三名の方が試験に合格され、資格を得ています。

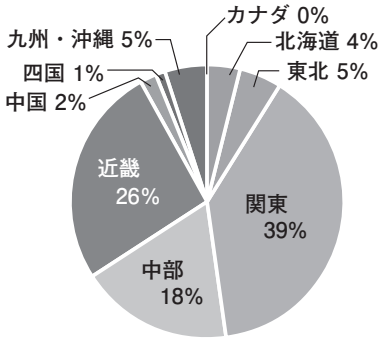
ウェブ講座は二〇一六年二月より立命館アカデミックセンターの直営講座の一つとして行われています。時間的・空間的制限がないのでどなたでも受講でき、日本国内はもとより、海外在住の日本人・外国人の受講も増えています。また公益財団法人日本漢字能力検定協会（漢検協会）との提携も大きな効果を上げています。漢検協会は漢検受検で培った個人の漢字能力を社会に還元できる人材を育てようと「漢検漢字教育サポーター」制度を二〇一二年に創設、一級・準一級合格者からなる「漢検漢字教育ネットワーク」会員の中から毎年数十名の方が選抜されて本講座を受講しています。二〇二〇年三月をもって第八期の受講が修了、四月からは第九期の受講が始まります。

漢字教育士は二〇二〇年三月末現在七二五名で、その活動拠点は全国そして海外に広がっています。内訳は名誉漢字教育士二名（白川静博士と武田鉄矢氏）と特別認定者二一名、課程修了による認定者七〇二名です。そのうち、課程修了による認定者の内訳は左の表の通りです。

年代別統計



地方別統計



客員研究員　津崎幸博先生の御逝去

所長　芳村　弘道

当研究所客員研究員の津崎幸博先生が二〇一九年九月三日に逝去された。七月一四日に七十九歳を迎えられて、二ヶ月足らずのことであった。先生は、一九六四年に京都大学文学部東洋史専攻を御卒業の後、大阪府枚方市にある私立啓光学園高等学校の教諭を勤められた。その後、六八年に大阪教育大学附属高等学校教諭に転ぜられ、七四年から兵庫県立浜坂高等学校、七八年から同伊丹高等学校、九五年から同尼崎稲園高等学校の教諭を歴任、二〇〇一年三月に定年退職された。

高等学校の教壇に立たれる傍ら、義父の白川静博士が平凡社から出版された『字統』『字訓』『字通』の字書三部作の編纂に、博士の御長女に当たる夫人の史様と協力された。続いて字書三部作の修訂と二〇〇三年出版の『常用字解』（平凡社）の編纂を助けられ、二〇〇六年の『人名字解』（同）においては、約半分の文字の解説文と細部にわたる編集を担当され、白川博士との共著として出版された。津崎先生のお力添え無くしては、白川博士晩年の字書の編纂、出版は順調に進むことは困難であったろうと思われる。

津崎先生には当研究所も協力をお願いして、客員研究員になっていただき、各地での講演などを行って下さった。その一端は、本誌第九号（二〇一五年三月発行）の御寄稿「福井ライフ・アカデミー漢字文化講座『白川文字学を学ぼう』の講演」の一文に紹介されている。これは二〇一三年一一月に三回行われた講演であった。第一回は「人名から探る白川文字学」（四日に福井市で開催）で、福井県の名字ベスト10中の漢字の成り立ちや人名に用いる漢字の問題点などを解説された。『人名字解』の共著者ならではの興味深い内容であったろう。第二回は「神様とつながる漢字」（一六日に福井市、三〇日に小浜市で開催）で、古代人の宗教観と深く関わる白川博士の字説を初学の人にも分かりやすく解説された。「日」の「模型らしき物」としてデパートで見つけたランチボックスを用いるというユニークな工夫を加えられたと記しておられる。

ここ一、二年は少し体調を損なわれたと仄聞し、直接お会いする機会がなくなり、白川静文庫の資料についての御教示を電話で承るに過ぎなくなった。御健康を案ずるばかりで、お見舞いにも行かず失礼を重ねていたところ、御逝去の翌日の九月四日に史様からの訃報を受け、驚くとともに、痛恨の念を深くした。伊丹市内で執り行われた五日のお通夜、六日の告別式には研究所からも参列させていただいた。まだまだ先生には御教示と研究所への御協力を仰ぎたかった。それが叶わないのは、まことに残念なことである。ここに改めて謹んで御冥福をお祈りするとともに、御生前に賜った御盛意に感謝申し上げる次第である。

在りし日の津崎幸博先生

「文字講話」特別上映会について

白川静博士没後十年企画の一環として二〇一七年十月に始まった「文字講話」特別上映会は、二〇一九年九月の開催を持ちまして、全二四話の講演が終了いたしました。この会は、白川静先生が一九九〇年から二〇〇五年に亘って行われた連続公演「文字講話」の映像を上映する会として、毎月一回、白川静先生の肉声と映像による講演をご覧いただいてまいりました。毎回多くの方が参加され、熱心に講演に耳を傾けておられました。最後の上映会で参加者の皆様から寄せられたアンケートには、「すばらしい上映会有難うございました。先生の真剣で誠実なお人柄がわかる良い講義でした。」、「二年間有難うございました。「白川静先生の世界」にふれることができ至福の時間でした」といった声をいただき、大変好評をいただきました。上映会は終了いたしましたが、研究所では引き続き、市民の皆様に参加いただける様々な企画を考えてまいります。

日程

二〇一九年　四月二十日　第十九話　「声系について」
五月十八日　第二十話　「漢字の将来」
六月十五日　第二十一話　「甲骨文について」
七月二十日　第二十二話　「金文について（Ⅰ）」
八月十七日　第二十三話　「金文について」
九月十四日　第二十四話　「金文について（Ⅲ）」
（全二十四話）

「文字講話」特別上映会の様子

＊白川静著作集の完結

平凡社『白川静著作集』別巻　甲骨文集・金文集・続金文集

一九九九年一一月から二〇〇〇年一二月にかけて『白川静著作集』全一二巻が出版され、続いて別巻の刊行が『説文新義』を最初として二〇〇二年一月から始まった。惜しくも二〇〇六年一〇月に白川静博士は逝去されたが、別巻刊行は継続され、このたび出版の『甲骨文集・金文集』（二〇一九年三月）、『続金文集』（二〇一九年一一月）をもって完結した。

前者は、白川博士が一九六三年八月初版の二玄社「書跡名品叢刊」の『甲骨文集』一冊・『金文集』四冊の「釈文篇」に校訂と訓読文を加えられた補訂版である。旧版では各冊末に釈文が付され、図版との対照が不便であったが、この別巻は［図録篇］と［釈文篇］とが各一冊に合本になっており、それが解消されている。後者は、『金文集』四冊の続編として、前著未収のもの、またその後に出土した青銅器三五〇点の精拓影を選び、訓読文と略解を施して四冊構成に編せられたものを、今回の出版に当たって正編同様に［図録篇］［釈文篇］各一冊に合本して出版されたものである。

白川博士は最晩年に金文研究に精力を注いでおられ、『続金文集』がその成果の一部となった。［釈文篇］巻頭の「續金文集について」の末尾に、「正續両編を併せて、現在における重要な金文資料はほぼ網羅しえたものと考える」と述べておられる。前者には一九九八年一二月に書き遺された「復刊後記」、後者には一九九九年四月に執筆して出版を待たれた「あとがき」が付されている。『白川静著作集』本巻一二巻・別巻二〇巻の二〇年に及ぶ出版を孜孜として継続された平凡社の関係各位のご努力に深く敬意を表し、全巻の完結出版を喜びたい。

（芳村弘道）

書籍紹介

『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要第十三號』

『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要第十三號』
立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所、二〇二〇年三月

『年号と東アジア：改元の思想と文化』
「年号と貨幣—漢興・大夏真興あたりを起点として—」

水上雅晴　編
（大形徹　分担執筆：「年号と貨幣—中国貨幣「漢興」「大夏真興」を起点として—」を担当）
八木書店古書出版部、二〇一九年四月

『宋代文学伝播原論—宋代の文学はいかに伝わったか—』

王兆鵬　著
萩原正樹・松尾肇子・池田智幸　監訳
朋友書店　二〇一九年十二月